

(4) 各地の上円下方墳と山王塚古墳

池上悟（立正大学文学部教授）

1

古墳の墳形は、基本的には築造された墳丘の形状によって命名されてきた。古く江戸時代の文化年間に『山陵志』を著した下野出身の蒲生君平は、山陵すなわち歴代天皇の陵をして、その形状を遺体を墓所に運ぶ宮（柩）車を模倣した形状と認識し、「下至敏達凡二十有三陵制略同焉。凡其宮陵因山従其形勢。所向無方大小高卑長短無定。其為制也必象宮車而使前方後圓為壇三成且環以溝」として「前方後円」の名称を付している。

しかしながら「前方後円墳」という名称の普及は大正時代以降であり、明治時代には天皇陵と区別して類似する形状の古墳は、坪井正五郎などによって「瓢形古墳」という名称が使用されてきた。

一方類似した名称である「前方後方墳」は、前方後円墳という古墳名称の存在を前提として考案されたものであり、出雲の野津左馬之助は、前方後円墳から方墳に移行する過程で現出した特異な形状の古墳と位置づけている。

古墳の主体をなす円形墳丘の円墳は、古く傘形などとも称せられてきたが、前方後円墳の名称普及時にあわせて一般化しており、方形古墳すなわち方墳も同様である。

「上円下方墳」という古墳の名称は、大正初年に確認される。平面方形の墳丘の上に円形の墳丘を重ねた形状を基とする命名であるが、これが確認時点の墳丘状況をもとにしたものであり、多数の古墳が可能性あるものとして報告されてきた。しかしながら単に視覚上での認識であり、その墳丘形状の要因にまで顧慮したものではなかった。

特に方形基壇上に円系墳丘を築造した京都市山科に所在する天智天皇陵（御廟野古墳）と、奈良県明日香村に所在する天武天皇陵（野口王墓古墳）は、上円下方墳の代表例として扱われてきた経緯があるが、昭和 57 年に白石太郎の検討により八角形墳として上円下方墳から峻別された。

ここでの 2 陵墓の上円下方墳という認識は明治維新後に重視され、明治 45 年に崩御された明治天皇の御陵である京都市伏見に造営された伏見桃山陵は、上円下方墳として築造されている。この伝統は東京都八王子市の武蔵陵墓地に造営された、大正天皇の御陵である多摩陵、昭和天皇の御陵である武蔵野陵に厳粛に継受されている。

しかしながら、上円下方墳の確定は発掘調査による確実な墳形認定が前提となるものであり、昭和 54 年に実施された奈良県・石のカラト古墳を嚆矢とする。しかしこの古墳の調査報告書の刊行は平成 17 年であり、内容の周知は大きく遅れた。

その後は、昭和 61 年に静岡県沼津市の清水柳北一号墳の調査が行われ、報告書は平成 2 年に刊行されている。平成 15 年には東京都府中市所在の熊野神社古墳の発掘調査が実施され、報告書は平成 17 年に刊行された。三鷹市・天文台構内古墳は平成 18 年から継続調査され、報告書は平成 23 年に刊行された。福島県白河市に所在する野地久保古墳は平成 20 年に調査が行われ、平成 22 年に報告書が刊行されている。

これらの先行調査を踏まえて埼玉県川越市所在の山王塚古墳の調査が行われたものであり、確実な 6 基目の上円下墳として認識されるものである。

今回の山王塚古墳の調査により、古墳規模は明確になった。確認できた規模は、下方部の東西長 56.3m、南北長 59.2 ～ 57.6m であり、やや北開きの、東辺と北辺が僅かに張り出す南北方向に長い形状を確認できる。また方形壇上に築造された円形墳丘は、南側が墳丘上に祀られた小社の参道の変形により南側に流れており、北西側が一部直線状を呈する部分も認められるが、試掘坑の掘り下げにより確認できた直径は、ほぼ 37m と復元することができる。

確認できた周溝幅は、おおむね 15 m であるが、南側は 19 m を超える。これは正面である南側を重視した古墳築造の結果と思える。即ち山王塚古墳は、下方部一辺 56 m、上円部 40 m 規模として企画されたものと確認できる。

この下方部一辺 56m と上円部 37m の比率は、他の上円下方墳の築造企画として復元できる $1 : \sqrt{2}$ 企画には合致していない。 $1 : \sqrt{2}$ の企画は、下方部の四角形の対角線長さの二分の一を上円部の直径とするものであり、正方形に内接する円形の直径と外接する円形の直径の関係でもある。

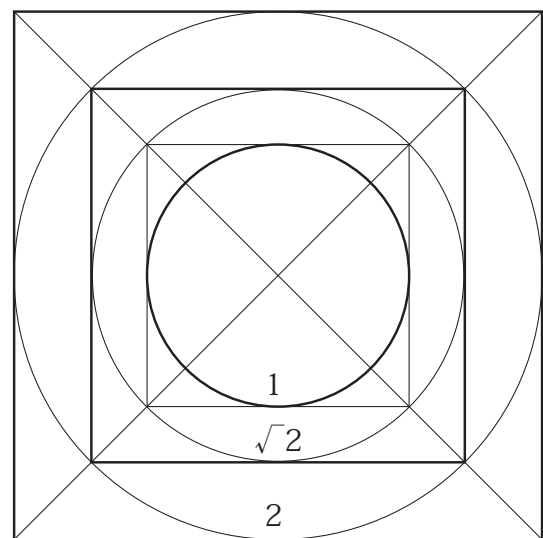
現在確認できる 6 基の上円下方墳は、既往の検討により、すべて下方部辺長と上円部直径の規模の関連は $1 : \sqrt{2}$ である点が明らかになっている。すなわち極めて厳格な企画のもとの古墳築造が考えられるものである。

上円下方墳の築造企画について、最初に論究されたのは清水柳北 1 号墳の報告である。この古墳は上円部直径 900cm、下方部は二段でそれぞれ一辺 1270cm と 1590cm、周溝外側は一辺約 2000cm である。この数値を 30cm を基準尺度として、30 尺、42 尺、53 尺、66 尺に復元して、比率は 5 : 7 : 9 : 11 で企画されたものと想定している。

次いで平成 17 年の石のカラト古墳の報告で高橋克壽は、下方部辺長の四分の一の 345cm を基準とした方眼に基づいて古墳築造が企画されたものと想定した。上円部の半径は一辺 345cm の正方形の対角線の長さである $345\text{cm} \times \sqrt{2}$ に一致しており、上円部直径と下方部一辺の長さの関連は、 $1 : \sqrt{2}$ ということとなる。

平成 21 年には府中熊野神社古墳の企画について、上円部直径 16 m、2 段の下方部一辺それぞれ 23 m と 32 m の関連を、正方形に内接する円弧と外接する円弧の関係、すなわち $1 : \sqrt{2} : 2$ である点が明確にされている。

東京都三鷹市所在の天文台構内古墳の方形の周溝で区画された下方部は、傾斜する南側のみに僅かに盛土する程度であり、明確な墳丘としては築造されてはいない。この方形区画の周溝に圍繞された墳丘第 1 段の平坦面の規模は、南側 2630cm、北側 2700cm、東側 3180cm、西側 2730cm であり、北東部分が突出変形してはいるものの、1 辺 2700cm を基本とする正方形の平面形が企画されたものと想定することができる。上円部の直径はほぼ 19 m と確認できる。この古墳における下方部の 1 辺の長さ



Ⅲ -1-2 図 上円下方墳の築造企画

27 mと上円部直径 19 mとの関連は、 $\sqrt{2} : 1$ であり、企画上の比率に合致している。

野地久保古墳は、奥州の南端の白河の地に位置する。東に張り出す尾根の先端に立地しており、果樹園の造成により上部を大きく削平され、下方部の一边を破壊されている。埋葬施設は安山岩質凝灰岩を組み合わせた横口式石槨であるが、底石のみが原位置を保って遺存している。上円部は完全に削平されていたが、基底の円形葺石により規模を確認できる。下方部は斜面を含めて全面葺石が施されている。上円部径と下方部一辺長は 1034cm と 1400cm の $1 : \sqrt{2}$ であり、基本企画に合致する。

山王塚古墳は、以上に概略を記した上円下方墳の築造企画とは若干の差異を明示するものの、基本は下方部南側正面の幅の 56m を基準とすれば当初の築造意図は上円部直径は 40m であったと考える。施工時の誤差として、上円部墳丘盛土の省略による結果としての直径 37m が考えられよう。

以上に確認できた各上円下方墳は、それぞれに所産時期を異にしている。最古の年代は東京都府中市所在の**熊野神社古墳**で 7 世紀中頃と想定される。熊野神社古墳の内部主体は南武蔵地域の終末期古墳に特有な軟質の泥岩を石材として使用した複室胴張り構造の横穴式石室である。

東京都三鷹市所在の**天文台構内古墳**からは、複室胴張り構造の横穴式石室の奥室から須恵器のフラスコ形提瓶と土師器の坏が 2 個体出土している。フラスコ形提瓶は東海産の儀礼用として使用されたものであり、丸い胴部と細長い頸部を特徴とするものである。土師器坏は比企型の系譜をひくものであり、合わせて 7 世紀代第 3 四半期頃の年代が考えられるものである。天文台構内古墳は、すべての点において熊野神社古墳を規範として築造されたものと考えることができるものであり、熊野神社古墳がやや先行して築造されたものと考えられる。

静岡県沼津市に所在する**清水柳北一号墳**の埋葬施設は墳頂に安置されていたものと考えられる石櫃と想定され、八世紀前半代に築造された火葬墳墓である。

奥州南端に位置する**野地久保古墳**の埋葬施設は、横口式石槨である。遺存した底石から石槨内部幅 130cm、奥行き 180 ～ 190cm、高さ 80 ～ 90cm と復元され、成人の伸展埋葬が可能な規模である。隣接して所在する谷地久保古墳の主体部は小形化した横口式石棺、幅 125cm、奥行き 140cm、高さ 115cm であり、火葬骨埋納ないしは改葬が考慮される規模である。谷地久保古墳との比較から野地久保古墳の所産時期は 7 世紀の第 4 四半期頃の年代が考えられる。

石のカラト古墳は畿内に所在する唯一の上円下方墳であり、様々な被葬者が想定されている。宝亀元（770）年に崩御された称徳天皇、あるいは霊亀元（715）年に崩御した天武天皇第 4 皇子の長親王などが想定されてはいるが、少しく年代が新し過ぎるようである。内部主体は幅 104cm、長さ 260cm 規模の横口式石槨であり、畿内の横口式石槨他例との比較では、7 世紀第 4 四半期の築造とするのが穏当であろう。

即ち上円下方墳は、7 世紀の後半代を主体として 8 世紀に及ぶ期間に地域を限定して築造されている点を確認できる。従って山王塚古墳もこの期間内部の築造と考えられる。

山王塚古墳からは、埋葬主体である横穴式石室の閉塞部から「ハ」の字状に開く敷石を施した墓前域部分が確認され、この部分から複数個体の須恵器片が出土している（Ⅱ -3-1 図）。1 に小形を特徴とする肩部の稜が顕著な単純口縁の平瓶、他は 3 個体のフラスコ形細頸瓶である。

フラスコ形細頸瓶は、2 は頸部から球形の胴部にかけての遺存、3 は口縁部のみの遺存するもの、4 は口縁部を欠損するものである。総体として胴部は高さよりも横幅がまさる形状であり、頸部は中

央に2条の沈線を巡らせ口縁部直下には突帯を巡らす特徴を有する。所産時期は7世紀の中葉と考えられるものであり、古墳築造年代の上限を画するものと位置づけられよう。

限定された範囲ではあったが、調査によって確認された埋葬施設は角閃石安山岩を石材として組み合わせた複室胴張り型の横穴式石室と考えられ、施設の入り口部に緑泥片岩の板材を使用している。

また石室閉塞部からは須恵器の小形平瓶の破片が出土しており、ほぼ7世紀後半代の所産と思われるものである。

南武蔵地域に所在する3基の上円下方墳の墳丘規模は、山王塚古墳が一辺56m、熊野神社古墳が32m、天文台構内古墳が27mと山王塚古墳が突出している。被葬者の生前の勢力が古墳規模に直截的に反映するのであれば、7世紀後半代の最有力古墳としては山王塚古墳ということになるが、古墳総体としては最有力古墳として認識することはできない。

熊野神社古墳は、上円部および2段の下方部の全面に扁平石が葺かれており、多大な労力の投入が考えられ、石室の基底部には版築工法を用いるなどの手間がかけられている。また現状では周囲を囲繞する周溝は確認されていないが、一辺32mを測る下方部の両側には「土取り穴」と称せられている幅30m以上深さ2m以上の掘り下げ部分が確認されており、これを墳丘の両側のみに施された周溝と位置づければ、古墳の兆域としての幅は100m近くとなる。

山王塚古墳の墳丘は上円下方墳としては本邦最大規模を誇るものの、上記の視点および古墳の立地を勘案すると熊野神社を上回る勢力の築造した古墳として位置づけることは困難と思える。

武蔵の3基と奥州南端の1基の上円下方墳には共通した要素を確認することができる。埋葬施設前面の墓前域（前庭部）の両側に「ハ」の字状に広がる側壁を河原石積みとする点である。従前の調査で、熊野神社古墳、天文台構内古墳、野地久保古墳で確認されていたが、山王塚古墳でも想定されるところである。しかしながらこの様相は上円下方墳に限定されるものではなく、上野の総社古墳群中の蛇穴山古墳、上総の内裏塚古墳群中の割見塚古墳、下総の龍角寺古墳群中の岩屋古墳などにも石材を換えて認められるところであり、終末期の地域首長墓に特徴的な事象である。

また武蔵の3基の上円下方墳は、いずれも胴張り複室石室を埋葬施設として構築している点が明らかとなった。胴張り石室は、北武蔵地域においては行田市酒巻古墳群中の6世紀後半代の事例を最古としており、前方後円墳体制の終焉後に地域に拡散している。南武蔵地域においては川崎市の第六天古墳の7世紀初頭以降に在地に定着している。

胴張り石室は群集墳の埋葬施設として導入されており、地域首長墓に採用された横穴式石室構造とは異なっている。武蔵最大規模の埼玉古墳群において確認される横穴式石室は6世紀末葉の將軍山古墳に構築された片袖型石室であり、当該期に広く関東地方の有力前方後円墳に採用されている。次期の埼玉古墳群中の首長墓の横穴式石室の様相は明確ではないが、7世紀前半代の首長墓としての直径80mの円墳である八幡山古墳には大型の胴張り複室石室が採用されており、胴張り石室の位置づけが昇華した点を確認される。前方後円墳体制から総体としての方墳体制への移行に伴う変革と理解されるものではあるが、東国においても稀有な事例である。

上野地域および下野地域においては長方形平面ないしは矩形平面石室が首長墓に採用されており、終末期群集墳に胴張り石室が構築されており、房総地域における胴張り石室は僅少例が小形古墳に認められるのみである。

現状では上円下方墳6基中の3基が武蔵地域の南部に集中しており、その意義が追及されなければならない。3基の上円下方墳は、武蔵南部の内陸部に南北に走行した東山道武蔵路に沿って築造されている。熊野神社古墳は国府に近接して所在しており、山王塚古墳は武蔵路に沿う位置に当たる。

7世紀前半代における武蔵の覇権は北部埼玉周辺勢力が掌握したところであり、その証左は直径80m規模の八幡山古墳の存在に顕示される。この地域首長墓の築造以後に、特徴的な上円下方墳の存在に明示される如くに地域の覇権は南武蔵勢力に移ったことが想定される。

この7世紀中頃には、地域有力集団の墓制としての横穴墓の形態が矩形平面横穴墓に転換している。この横穴墓の形態は、上円下方墳の埋葬施設としての複室胴張り構造の横穴式石室が、従前から昇華して第一級の位置づけが果たされ、新たにこの下位に位置づけられた矩形平面の横穴式石室を規範としたものと想定される。この矩形横穴墓の分布は南武蔵を主体として、武蔵野台地の縁辺沿いに北武蔵まで及んでおり、熊野神社古墳を中枢とし、山王塚古墳と天文台古墳が補佐した上円下方墳体制の波及した範囲、即ち有力麾下集団の分布を示すものと理解される。

【参考文献】

池上 悟「上円下方墳の名称と築造企画」『白門考古論叢Ⅱ』中央考古会 平成20年

池上 悟『古墳文化論攷』六一書房 平成22年

池上 悟「上円下方墳築造企画の導入と展開」

『考古学論究』立正大学考古学会 第14号 平成24年

池上 悟「武蔵地域における展開期横穴墓の一様相」

『立正大学大学院文学研究科紀要』第29号 平成25年